

精巣腫瘍ⅢB2、間質性肺炎からの復活

情報インフラ・就労など 患者支援活動を進める

大久保淳一 さん (外資系証券会社勤務)



精巣腫瘍は日本人男性10万人に1〜2人が罹患するといわれている。この希少がんのステージⅢB2と診断され、さらに間質性肺炎を併発しながらも克服。趣味のウルトラマラソンを走り切り、今、がん患者さんの支援活動を進めている。

取材・文 ● 吉田耀子

おおくぼ じゅんいち

1964年長野県生まれ。89年名古屋大学工学部卒業、91年同大学院工学研究科修了。大手石油会社で7年間勤務した後、シカゴ大学ビジネススクールに留学。99年にMBAを取得し、大手外資系証券会社に入社。これまでに完走したフルマラソンは30回以上。サロマ湖100キロウルトラマラソンは5回完走している。

大久保さんの経過

- 2007年 3月 マラソントレーニング中の怪我による入院中、右睾丸の委縮を感じる
エコー・血液検査の結果、精巣腫瘍と診断。右睾丸の摘出手術を受ける
術後の病理検査で、セミノーマ・胎児性がん・卵巣嚢腫瘍の混同した精巣腫瘍(ⅢB2期)、腹部・肺・リンパ節(首)への転移もあると言われる
- 4月 BEP療法開始。高熱・吐き気・耳鳴りに悩まされるも腫瘍マーカーは陰性化
- 7月 間質性肺炎を併発、治療開始。
セカンドオピニオンをとり、再発予防のためのリンパ節郭清術を受ける
- 9月 職場復帰も、間質性肺炎増悪
- 11月末 退院、自宅療養
- 2009年 夏 職場復帰
- 現在 経過観察終了

世はマラソン・ブーム。その最高峰ともいえるのが、ウルトラマラソンの異名を持つ「100キロマラソン」だ。だが、その苛酷さは、42・195キロのフルマラソンとは比べものにならない。どんなに健康で経験豊富なランナーでも、この究極のレースで完走するのは容易ではないという。

そんななか、ステージⅢB期という最終ステージの精巣腫瘍に冒されながらも、手術と抗がん薬治療により克服。退院後、

「サロマ湖100キロウルトラマラソン」を完走し、奇跡の復活を遂げた人がいる。東京在住の外資系証券マン・大久保淳一さん（49歳）だ。

取引先とのしがらみでマラソンを始める

大手石油会社の営業として7年間活躍し、シカゴ大学ビジネススクールに留学。99年に経営学修士号（MBA）を取得し、大手外資系証券会社に転職した。入社後はヘッジファンドの運営を支援する業務を担当。金融は未経験ということもあって、1日でも早くキャッチアップしようと、早朝から深夜まで無我夢中で働いた。

ある機関投資家まで営業に出かけたときのことだ。

「何でもやりますので、よろしくお願いします！」

元氣よく挨拶すると、担当者は意外なことを言った。

「君がフルマラソンをやるなら、取引してやってもいいよ」

マラソンは大嫌いだ、それで取引が成立するなら話は別だ。大久保さんは快諾し、半年間のトレーニングを経て、2000

年にホノルルマラソンを完走。これを機に、大久保さんは走ることの魅力にとりつかれていく。「日々、ハイプレッシャーの中で仕事をしているせいか、走っていると嫌なことを忘れられるんです。走れば走るほどタイムもよくなり、成長が実感できる上に新しい友人もできる。それが楽しくて、どんなのめりこんでいったんです」

次第に、普通のマラソンでは

物足りなくなり、39歳を迎えた03年6月、サロマ湖100キロウルトラマラソンに初挑戦。北海道の大自然の中でゴールした



世界を舞台にバリバリと仕事をこなしていた罹患前、社内パーティーで

瞬間、大久保さんは経験したことのない至福感に包まれた。以来、4回連続でサロマ湖100キロウルトラマラソンを完走。大久保さんは、公私ともに、充実の時を迎えていた。

足の怪我で入院中 精巣腫瘍を発見

大久保さんの精巣にがんが見つかったのは、右足の怪我で入院中のことである。

07年2月、厳寒の軽井沢でトレーニング中、崖下に転落して東京慈恵会医科大学附属病院の救急外来に担ぎ込まれた。右足の外くるぶしを骨折し、足首の靭帯を断裂する大怪我で、5時間にと及ぶポルト接合手術を実施。1カ月間リハビリを続けたが、退院間際になって、発熱に悩まされるようになった。

（オペ中に入れた尿チューブから、バイ菌でも入ったかな）

そう思い、下腹部を触ってみると、睾丸の大きさが左右で全く違う。右の睾丸が、まるで梅干の種のように萎縮して硬くなっていた。

（何か大変なことが、俺の体の中で起こっている）

翌日、インターンに話すと、泌尿器科に直行。エコーや血液検査、レントゲン検査などをひと通り終えると、担当医はこう言った。

「がんの疑いがあります。精巣腫瘍です。1週間後に睾丸の摘出手術を行います」

突然の告知に、大久保さんはすっかり仰天。動揺のあまり、矢継ぎ早に質問を繰り返した。「先生、『がんの疑いがある』ってどういうことですか？」

「私はマラソンランナーです。睾丸が1つなくなったら、パフォーマンスが崩れて走りにくくなりますよ。睾丸の代わりに入れる、義眼ならぬ、義玉みたいなものってあるんでしょうか」

必死に抵抗を試みる大久保さんに、担当医はこう告げた。

「大久保さん、事は一刻を争うんです。精巣腫瘍は進行の速いがんです」

ランス・アームストロングを支援に

だが、告知をされても、大久保さんは事実をなかなか受け入れることができなかった。健康オタクでスポーツマンの自

分が、がんになるはずはない。たとえなったとしても、必ず治るはずだと信じて疑わなかった。

「当時、私が一番恐れていたのは、休職期間が長期化すること、マラソンができなくなることでした。42歳をピークとして人生が下り坂に向かい、『社会的弱者』として生きることになるのが、何より怖かった。一日も早く、会社とマラソンに復帰したい——その思いでいっぱいでした」

そんな大久保さんの支えとなったのが、担当医から教えられた、米国の自転車選手ランス・アームストロングの存在だった。彼は25歳で精巣腫瘍を発症し、一時は再起不能といわれたが、病を克服して自転車競技に復帰。その後、ツール・ド・フランス7連覇という偉業を成し遂げた人物である。

自分も彼のように、がんを治して、さらなる成長のステップを上っていきたい——大久保さんは、深く心に期するものがあった。以後、ランス・アームストロングは、輝けるロールモデルとして、大久保さんの闘病生活を照らすこととなる。

腹部・肺・首に転移 診断は「ステージⅢB」

整形外科の退院から1週間後、3月16日に右精巣の摘出手術が行われた。病理検査の結果、セミノーマと胎児性がん、卵黄嚢腫瘍の三種が混合した、治りにくいがんと判明した。さらに、腹部と肺、首のリンパ節からは転移も見つかった。

「大久保さんのがんは、最終ステージのステージⅢBです」

担当医の言葉に、大久保さんは愕然とした。その衝撃は、最初の告知のときとは比べものにならないほど強かった。だが、絶望に沈む大久保さんの心を奮い立たせたのは、ランス・アームストロングだった。自分も病氣などに負けてはいられない。全力で病氣と闘ってやる——大久保さんは全身に闘志をたぎらせた。

精巣腫瘍ステージⅢBの5年生存率は49%。その厳しい現実にも直面しても、大久保さんは相変わらず、死生観とは無縁だった。がんが完治することを信じて疑わず、抗がん薬治療で3ヶ月6カ月の入院を強いられること

*セミノーマ=精巣腫瘍は、生殖細胞由来の胚細胞腫瘍と、性腺腫瘍由来・その他からなる非胚細胞腫瘍からなる。胚細胞腫瘍には造精細胞形成の要素が分化して腫瘍化したセミノーマ（精上皮腫）と、胎児形成や胎盤形成の要素が分化して腫瘍化した胎児性がん、卵黄嚢腫瘍、奇形腫、絨毛がんなどの非セミノーマの2つに分けられる。セミノーマと非セミノーマの混合腫瘍は非セミノーマとして治療される

を思い悩んだ。

なにしろ、勤務先は「生き馬の目を抜く」といわれる外資系証券会社。日系企業の3〜4倍は働いて、短期的に成果を挙げることが求められる。

「会社を解雇になるかもしれない。復職しても、自分の居場所がなくなつて、閑職に追いやられるのではないか」

そんな不安に加えて、大久保さんを苦しめたのは、「転移というイベントによって、自分の人生が確実に下り坂に入ってしまった」という寂しさだった。

「それまでは、常に階段を登り続けたい、と思っていましたか



治療中は、自らを奮い立たせ全力で闘った

ら。仕事でもマラソンでも子育てでも、人間として成長し続けることに、人生の価値を見出していたのです。にもかかわらず、がんの転移によって人生が下り坂に転じたのかと思うと、やりきれなかった。生きながら死んでいるような気持ちになつてしまったんです」

BE P療法を開始、 そして間質性肺炎を併発

4月10日、プレオマイシン、エトポシド、シスプラチンの3剤併用によるBE P療法がスタート。初回の治療では40度近い高熱が出て、強烈な吐き気や耳鳴りに苦しめられた。弱音を吐きそうな大久保さんの携帯に、妻からの電話がかかってきたのは、2日目の夜のことだ。

「抗がん薬を敵だと思っているでしょう。抗がん薬はがんをやっつけてくれる最大の味方なのに、怖がっているからいけないのよ。明日から、治療のときは手を合わせて『お願いします』と言つてごらん！」

妻の勧めに従い、翌日から抗がん薬を点滴するときは手を合わせて拝むようになった。す



お子さんたちと

ると、不思議と副作用の苦しみが和らぎ、病氣と闘う気力が甦ってきた。

「先生、俺、第1クールで3種類の腫瘍マーカーを全部正常化させてみせますよ」

「第1クールで陰性化なんて、聞いたことありません。転移もあるんですから、焦らないで」「じゃあ、俺がその最初の症例になってみせますよ」

大久保さんは意気軒昂だった。徹底的に、納得するまでベストを尽くす——ビジネスマンとして鍛えた仕事の流儀を、大久

保さんは闘病生活でもいかな

く発揮した。病室（個室）の棚

には専門的な医学書をズラリと並べ、米国の医学雑誌の論文にも目を通した。「今はボトム」「苦

しみは一瞬、喜びは一生」「サロマで自己新を出してやる」「必

ずうまくいく」「すべて昔話になる」——病室の壁は、積極

的な言葉を書いた紙で埋め尽くされた。その闘志は医師団にも

伝わり、よい意味での緊張感が生まれていった。

幸い、抗がん薬治療が効果を

示し、なんと第1クールで、腫瘍マーカーの値がすべて陰性化

だが、喜びもつかの間、思わぬ伏兵が待ち受けていた。

プレオマイシンの薬害による

間質性肺炎を併発したのだ。7月、副腎皮質ホルモン薬・プレ

ドニンによる間質性肺炎の治療がスタート。この合併症の恐ろ

しさを、大久保さんはまだ知る由もなかった。

セカンドオピニオンで腹部のリンパ節を郭清

腫瘍マーカーの値は下がりは続いていたものの、CT画像には、腹部にがんの影が残っていた。

*間質性肺炎＝肺胞と毛細血管を取り囲む間質組織が炎症する疾患

がんが壊死している可能性も考えられたが、画像だけでは判別がつかない。そこで、主治医からは、手術で腹部のリンパ節を取り除き、病理検査を行った上で、今後の治療方針を決めることを勧められた。

だが、大久保さんは納得がいかなかった。これは確認のため

の手術であって、治療のためではない。もし、がんが壊死していたら、開腹するだけ損ではないか——そんな思いがどうしてもぬぐえなかったのだ。そこで、セカンドオピニオンを求めて国立がん研究センターやがん研有明病院など、4件のがん専門病院を訪問。医師の意見は真つ二つに分かれたが、ある医師のひと言が背中を押した。

「もし手術を受けなかったとすると、体調が悪くなるたびに、再発の恐怖に怯えることになる。しかし今、手術をしておけばスッキリとした気分できている。どちらを選びますか？」

大久保さんは手術を決断。8月上旬、腹部リンパ節を郭清する手術が行われた。幸い、腹部リンパ節のがんはすべて壊死し

がんと生きる 大久保淳一さん

ていたことが判明。これようやく退院して会社に戻り、マラソンを再開できる——大久保さんはうれし涙にくれた。

間質性肺炎の悪化で死の淵をさまよう

晴れて退院の日を迎えたのは、手術から1カ月後のことだ。

07年9月、半年以上の休職期間を経て、1度は職場に復帰。

「間質性肺炎をなめてはいけません。絶対に無理をしてはいけませんよ」

医師たちからそう警告されていたにもかかわらず、失われた時間を取り戻そうと、大久保さんは無理を重ねた。風邪をひいて自宅療養に切り替えたが、乾いた咳がでるようになり呼吸が苦しくなった。間質性肺炎になると、肺が空気中の酸素を取り込めなくなる。まるで、サラップを顔に巻かれて、海に沈められたような苦しさだった。急ぎよ検査が行われたが、CTには真つ白な肺が映っていた。恐れていた間質性肺炎の急性増悪が起こった。

「無理しちゃダメだって、何回も言ったじゃないですか！」



見事に走り切った
「サロマ湖100キロウルトラマラソン」

呼吸器科の医師は嘆くように言った。呼吸機能検査の結果、肺活量は54%まで低下。間質性肺炎の急性増悪が起こった場合の5年生存率は非常に低い。さしもの大久保さんも、今度ばかりは死の恐怖から逃れることはできなかった。

退院、そして再び100キロマラソンへ

だが、医師たちの懸命な治療が効果を表し、病状は快方に向かった。11月末に退院し、自宅療養の末、職場に完全復帰したのは09年夏のことだ。この間、会社は大久保さんの復帰を待ち続け、職場は復職に向けた全面的サポートをした。

念願のランニングもいよいよ

再開した。まずは近所の公園へのウォーキングから始め、10年秋には八ヶ岳縄文の里マラソン大会で、ハーフマラソンに参加。最後尾でゴールだけはしたものの、理想と現実のギャップに打ちひしがれた。

翌年10月、腫瘍マーカーが陽性化。再測定の結果は「正常」だったが、闘病中の記憶が鮮明に蘇ってきた。ランス・アームストロングは病気を克服してさらに高みに上っていったのに、自分はハーフマラソンでビリになったぐらいで意気消沈している。肺機能の一部を失ったぐらいで、何をあきらめているのか。大久保さんは、再びフルマラソンに挑戦することを決めた。

ようなトレーニング漬けの日々が始まった。11年秋の諏訪湖ハーフマラソン、12年春のかすみぐうらフルマラソンを次々に完走。13年6月には、ついにサロマ湖100キロウルトラマラソンを見事完走した。それは大久保さんにとって、最高の晴れ舞



現在は、次の活動の準備を進めている

台であると同時に、闘病生活を締めくくる卒業式でもあった。「これで、今後の活動を行うための区切りができた」と、大久保さんは感じた。健常者でも完走が難しい苛酷なマラソンを走り切ることで、「がん患者は弱い存在ではない」と証明することができた。それは、大久保さんが新たな人生に踏み出すための通過儀礼だった。

次の人生はがん患者さんのために

現在、大久保さんは、患者支援活動を行うための準備を進めている。

「入院中、患者さんが次々に亡くなるのを見て、『なぜ、あの人は亡くなったのに、自分は生

きているのか。自分は何かによって生かされ、役割を与えられたのではないか』と思うようになりました。患者さんやご家族の相談に乗ることも増えましたが、このまま漫然と生活をしていたら『こんなことのためにお前を生かしたわけではないぞ』と、神様に怒られそうです……。それで、100キロマラソンを完走したら、残りの人生は患者さんのために生きたいと考えたのです」

まずは、働き盛りのがん患者を支援する非営利団体と、患者支援をビジネス化する株式会社との2つを立ち上げたい、と大久保さん。具体的には、患者と患者をつなぐ情報提供のインフラ作りなどを考えているという。「がんは私に、後半生を生きるための強烈なモチベーションを与えてくれました。『こんなことで人生、下り坂になってたまるか』と思いき、成長の階段をさらに上っていきたくと思った。その意味では、病気で失ったものより、得たものの方がはるかに大きい。これからは、社会に恩返しするため時間を使っていきたいと考えています」